



立ち上がる若手起業家たち

次世代を担う若者たちの中に「ようし、自ら起業家になろう」と思いきった行動に移る活動的で前向きな若者も目立ってきました。

10年後を見据えて



「ステーキバル開店まで」

プラチナビーフオーナー兼店長 高田大也さん(32)

京都市東山区大和大路四条下ル

今年5月、四条大和大路にオープンしたてのステーキバル「プラチナビーフ」。高田さんは「祇園界隈で一番安いステーキ店を目指しています」と笑顔で話します。

「女性同士で気軽にお肉を食べる店」がコンセプト。約20坪の店内に29席、テラス席もかわいい。お店の看板メニューは独自の仕入れルートで黒毛和牛のステーキ。京野菜を使った野菜のステーキも魅力的だ。

高田さんは京都市内の公立高校出身。国立

大学を目指し予備校へ通っていた頃、焼き肉店「益市」でのアルバイトを経験。高田さんがいた益市は、自営の他に京都市内の飲食店オーナーと関連業者で構成される「TUBASU会」に所属。地域の活性化と社会貢献を目的に活動もしてきました。オリジナル焼酎「TUBASU」の販売では養護学校と連携し、通学生が描いた絵画を

焼酎のラベル

に使用。1本

仕入れるごとに100円の

寄付が積み立てられ、養護学校等へ寄付する取組みをしています。また、年に数回「TUBASU会」主催の祭りを実施。会員等が屋台を出店。その売上げを寄付金として全額福祉に活用しています。(TUBASU会



HP <http://tubasunet/>

「お客さんに喜んでもらえる仕事が面白い。益市は絶対大きくなると思った」。両親の反対を押し切り高校卒業後に飲食業界へ飛び込みました。「自分では周囲と違う進路選択に何の迷いもありませんでした。10年後を見据えていたので」とアルバイトから正社員、そして店長として10年勤務した後に起業へ。インターネットで物件を検索し、自己資金の他に各省



庁からの国庫金の申請などに追われました。現在、高田さんの他にアルバイトが6人。「僕は未経験者を積極的に雇用しています。興味関心がある人は仕事にも没頭してくれる人が

照明芸術にこだわり



京阪「清水五条」駅から徒歩で5分ほど、ものづくりの若者が集まった築100年の町家長屋「あじき路地」。長屋の大家さんが、空き家を若いクリエイターの応援のために使いたいと考え入居を募集、現在選ばれた15人が軒を並べています。村上菜也子さんが照明作品をつくる「月あかりデザイン研究室」もその一つです。村上さんはもとと京都精華大学で染織の勉強をしていたのですが、イベントで空間演出の手伝いをしたのがきっかけで光の演出に興味を持ち、現在は自らのデザインを和紙に



木版刷りし照明器具を制作しています。2004年には最初の個展を開きました。そして、2008年の秋からお店を始めました。多数のメディアにも取り上げられ、大活躍の村上さん。学生時代はアルバイトをしながら、服飾の勉強をしたり、卒業後にはイベントの手伝いを通してお茶のある空間を演出したりといろいろな事に挑戦したそうです。会社に就職したのとは違って、イベントや興味を持った場所で出会う人との縁がきっかけとなり、沢山の繋がりが、創作活動の基盤をつくったといっています。一人では何も出来ない事を常々実感しているという村上さんは、若い時には興味のある事を何でもやってみて、そこで同世代の人やその道の先輩達に出会って時間を共有し自身の思いをぶつけ、学ぶ事が大切と語っています。村上さんの現在の夢は、特別に漉いた

多い。彼らのなかから飲食業界を志す同志が育ってくれたら」と話します。そんな高田さんが、現代を生きる若者に伝えたいメッセージとは「自分らしさを忘れず

でも何でも挑戦したい



月あかり 村上菜也子さん(36)
京都市東山区大黒町通松原下ル

に、個性を大事にしてほしい。あなたにしか出来ないことがあると思う」。熱いメッセージに彼の人柄が現れていました。(子ども・若者支援室 繁澤あゆみ)

行列のできる八百屋

八百さる代表
森田 弘昭さん(33)
京都市上京区西堀川通下長者町上ル

奈良県の八百屋で10年間勤めていた森田さん。「世の中に自分がどれだけ通用するのか?」と考え、10年のキャリアとノウハウを活かし、平成19年に京都市上京区の堀川商店街に八百屋「八百さる」を独立開業しました。熟練の目利きによる品質の良さと安さ、店名に「さる」が付いていることからバナナを年中100円で販売するなど、人柄あふれるサービスを売りに人気店となりました。根強いファンを持ち、売出し日には、商店街に行列ができます。お客さん、従業員、関連業者など含めてみんなを幸せにしたいという思いから、さらなる事業拡大を目指しています。



学生主体の事業運営

PKT代表
松榮 秀士さん(29)
京都市左京区松ヶ崎呼返町



大学生の就職難や離職率の増加から、自ら提供する「つくる力」に着目し、それらを学ぶことのできる環境を作りたいとの思いで、平成22年PKTを設立。中高生向けの個別学習塾や英語塾を通して学ぶ英語塾のほか、村留学やキャンプなどのプロジェクト企画を大学生が主体となって運営する機会を提供し、「つくる」から学べる環境づくりを行っています。継続的な事業運営のためには、相手にとって求められるものを提供し続けることが大切。また、そのような仕組みをつくることのできる人間になってもらいたいと、事業運営しています。

まつげエクステ大好き

日本まつげ美容株式会社代表
永津 美也子さん(35)
京都市中京区錦小路通東洞院東入ル

目標もなく周囲に迷惑と心配をかけていた10代〜20代前半。人との出会いの中で自ら学びたいと決心し、スクールに通う。卒業後、自宅に美容サービス全般を扱うサロンを開業。平成17年京都移転と共にまつげエクステの専門店として方針転換。また、5年後には社会保障を充実させるため法人化へ。技術・品質の高さから口コミで評判が広がり、連日予約でいっぱい。また、日本アイラッシュアカデミーを設立した他、日本まつげエクステ協会の理事を務めるなど普及活動や後進の指導にも力を注いでいます。大好きなまつげエクステとの出会いが、人生の転機になりました。



若者に目立つ社会的起業家

特定非営利活動法人ユースビジョン 代表 赤澤清孝さん

「若手起業家」といえばかつこよく聞こえますが、仕事を軌道に乗せるには、それなりの経験と同志づくり、精神的なプレッシャー、経済的なりiskを感じながらブレずに辛抱強く自己実現を目指すことが肝要でしょう。

若手起業家を支援する京都の特定非営利活動法人ユースビジョン代表の赤澤清孝さんに話を聞きました。

今の社会で若者が

どんな夢を持ち、その実現に向けてどうあるべきか？

たしかに今の若者は、かつての好景気を実感していない、たとえば学生下宿も減ってきた。実家から通うと安くつくが、良い意味の自由と時間が少ない。早めの就職活動にイライラしながら閉塞感が漂う。自分で起業家を目指すにはほど遠い雰囲気だ。趣味をふくらますとか、仲間と将来を語り合い自己実現に向けてボランティア活動を始めるなど、すべき事項はいっぱいあると思う。

赤澤さん世代と今の若者とは環境的にもギャップを感じる

私は38歳だが、中高生の頃はバブルの時代。大学を出たら就職にありつけるだろうくらい漠然



と思っていた。立命館大学時代は大学生協の運営に頭を突っ込んだり、環境問題のサークル活動をしてきた。二年生のとき神戸を震災が襲った。実家が伊丹にあってかけつけた。学生ボランティアの様子を見て京都で何が出来るか、被災地の子どもたちを京都で学習

サポートしたり、京都学生ボランティアセンターを立ち上げた。大学院を出てそれをNPO化し、2005年にユースビジョンを創り代表となった。東北震災で活躍の場が拡がり何度も東北の被災地を訪問した。今もその活動は続いている。

大阪を中心に行われている若手の企業コンペとは

1995年から毎年一回、大阪や神戸などで企業コンペを開催している。私は審査員だが全国から学生提案も含めてかなりの応募がある。ホームレス支援をして釜ヶ崎のおじさんたちの仕事をつくる若い女性グループのNPO団体や、定時制・通信制の高校生に働くワークショップを開いてビジネスの場を作る。また障がい者施設の作業で付加価値の高いプライダル関連のカードやアクセサリーといった小物づくりをして増収に結びつけるなど、弱者にまなざしをそそいだ社会的な起業家が目立った。近く「エッジ2014」というタイトルで社会的起業家を目指す若者のためのビジネスプランのつどいを計画、9月下旬に合宿、テストをしながら来年2月に最終審査をする。これからも若者の起業や活動などを支援するため、いろいろな団体とかかわっていくつもりです。